

「わんないと大村」

友「おう！久しぶりだな。大村に戻ってきたんだって？」

自「ああ...まだ別に戻るって決めたわけじゃないけどな。とりあえず帰ってきたってとこさ。」

友「どうした？大村湾は閉鎖的で穏やかだから魚の身が締まらない。それに汚いからもうだめだ！直に獲れなくなる！魚も人も一緒に、外に出て荒波にもまれないとダメになっちゃう。だから、俺は東京に出て荒波にもまれて生きていくんだって、啖呵を切って親父のすし屋を飛び出していったあの威勢はどこに行った？」

自「うるせーな。そんなに甘くねーんだよ！」

友「そうだ！甘いのはお前だ！」

自「そうじゃないんだよ。俺も東京行ってすし屋に入って修業したさ。さすが東京だ。全国各地から旨い魚が沢山入って来てたよ。でもなに食っても甘くねーんだ。」

友「そんなに違うもんか？」

自「ぜんぜん違う。辛いんだよ。」

友「辛い？魚がか??」

自「いや、醤油。醤油が馬鹿みたいに辛いんだよ。なんであんなもの付けるんだ？魚の味を殺してる。」

友「醤油って、当り前じゃねーか！こっちと違ってあっちの醤油は辛いんだよ！」

自「え？そうなの？」

友「そんなことも知らずに、東京のすし屋で働いてたのか？外のこと知らないにも程があるぞ！」

自「え？そんなこと知らないから、すし屋の大將に醤油変えろって言ったらクビになって。わけわからねえ」

友「わけわからないのは、お前だよ！そりゃクビにもなるだろ。で、店をクビになって女にも捨てられた訳か」

自「あっ！お前どこまで知っているんだ！」

友「もう皆、知ってるよ。」

自「別に、店をクビになったから別れた訳じゃねーよ。」

友「本当か？何があった？」

自「最初は、店に来てくれるお客さんの一人でさ、看護師さんだっていうのよ。華奢で小さくて可愛らしくてさ、話をしても明るくて楽しくて白衣の天使ってのはいるんだなって思ったよ。で、そのうちに仲良くなって、食事とか行くようになって最初のうちは良かったんだけど、そのうちにだんだんその女がこすっ辛くなっていったよ。」

友「こすっ辛い？」

自「そう。夏になってからだな。一緒に飲みに行っ、生ビール頼んでさ、つまみにゆでピーナッツ頼んだら信じられないっていうんだよ。ふつう枝豆だって。おかしいだろ？昔からビールにはゆでびーなっただろ？」

友「昔からじゃなくて大村だけな」

自「で、夏だからシャコ食べようって言ったら、そんな紫色のはヤダ！かわいい赤のエビがいいって。いや色はどうでもいいんだと。味は夏と言ったらシャコを塩ゆでした奴をハサミでむいて食うのが旨いんだって言うてるのに、やだ！かわいくない。味に旨い不味いはあってもかわいいかわいくないはどうでもいいんだ！って言ったら、意味わかんないってこすっ辛いこと言ってきたからさすがに怒ったね。こっちには長崎 さだまさし 関白宣言の血が流れてるからね。いい加減にしろ！黙って男の言ったとおりにしてあげばいいんだ！って怒鳴ってやったら、黙れ！小僧！！って一喝された。あっちには美輪明宏の血が流れてた。」

友「それこそ意味が分からないけどな。」

自「でも、一番許せなかったのが正月な。正月なのになまこ食わねーのよ。食わねーどころか出てきもしないのよ。あれ？なまこは？って聞いたら、は？なんで、なまこ？って言うから、昔から正月はなまこ食べるだろ？って」

友「だから、大村だけな」

自「は？聞いたことない、食べたことないって。いやいやいやいや、どこの家庭でもお正月はどんぶりになまこ入れてみんなスプーンですくって食べるでしょ！って言ったら、どこの国？ってまたこすっ辛いこと言ってきたから、さすがにキレタね！こっちは長崎 さだまさし 関白宣言の血が流れてるからね。いい加減にしるって！横っ面ひっぱたいてやろうと思ったら、逆にボコボコにされて。つえーのなんの。あっちは、長与千種クラッシュギャルズの血が流れてた。だから、捨てられたんじゃない。逃げてきたんだ。」

友「どっちでもいいよ！さっきも言ったろ、甘いんだよ、お前が。」

自「そうか??」

友「そうだよ。世間の荒波だか身が締まるだとか知らねーけど、目の前にこんなに穏やかでいい海があるってのに、それを捨てて出て行っちゃうんだから。お前だけじゃない、魚もだ。大村湾は閉鎖的で穏やかだから塩分濃度も薄いんだ。だから、大村湾で育った奴はみんな甘くなるんだ。ウニなんて特にそう。醤油が辛いだけじゃないんだよ。実際に魚も甘いんだ。」

自「そうなの？」

友「お前、外のことだけでなく大村湾のことも知らないな。」

自「いや、でも年々、汚くなって魚も獲れなくなって来てるだろ？獲れなきゃどうにもならないだろ？」

友「確かにな。魚の獲れる量が減ってきてるのは確かだ。でも、みんな言うほど汚くない訳じゃない。生活排水の処理能力だって高くなってきてるしな。実際に、赤潮の発生は少なくなっているしな。」

自「じゃ、魚が少なくなったのはどうして？」

友「違うところに問題はあるな。水草のアマモが環境の変化によって定着しなくなってきているな。生えなくなって来ている。アマモがたくさん生えていると、魚の餌にもなれば住み家にもなる。アマモなどの海草が大村湾を支えているんだ。だから、今、いろいろ研究してアマモが増えるように種を集めたり研究している。海草もあまいんだ。それに、大村市だって魚の住み家になる魚礁を作ったりして皆で、いろいろ試している。そのうち魚は戻ってくるようにしてる。その前に、お前がもどってきやがった。だいたい、悔しいと思わないのか？数は少なくなったけど旨い魚が目の前で獲れるのに、どの本見ても、旨い店は他の場所の店ばかり載って。長崎県大村市ってお前が親父の店を継いで載せてみろ。」

自「でも勝手に飛び出したんだ、親父が許してくれるかな。家に入れてくれないと思うぜ。」

友「ほれ。これでも食え。」

自「なんだ？」

友「寿司だ。さっきお前の親父に会って、今からお前に会いに行くって伝えたら持って行けど。」

自「寿司って、これ大村寿司じゃねーか？」

友「そうだよ、大村寿司の味は？」

自「甘い」

友「そうだよ、息子が甘けりゃ親父も甘いし、寿司も甘いんだ。魚も海草も醤油も俺たちも大村は全部甘いんだ。だから気にしないで明日から親父と一緒にがんばれ。」

自「分かった。」

友「よし！じゃ、これから皆集めてお前の復帰祝いだ！。今日は、俺が養殖してる牡蠣ごちそうしてやるから。ケーブルテレビでも紹介されたんだぞ！」

自「よし！じゃ、これから毎晩やろう！」

友「なんでよ。復帰祝いは一晩で充分だろ」

自「そんな、こすっ辛いこと言うな！だって、俺たちは大村湾のお陰で暮らせているみたいなもんだろ？大村湾が無かったら暮らしていけないんだ。」

友「そうだよ。」

自「だったら、湾無いと（ワンナイト）はダメだ。」